

チクルク山の位置

The Location of Mount Chiquurqu

2019年6月13日 改訂 安田公男

Rev. Jun. 6th, 2019 Kimio Yasuda

URL : chinggis-ff

1. 目的

モンゴル史の史料の地名には不明なものが多い。チクルク山もその一つである。この山と一緒によく出て来るチェクチェル山について、筆者は現在のイフ・ツァガン・オンドル山であり、その麓にあったシラ・ケールは現在のフルンブイル町であると推定した。この結果を基に、チェクチェル山と一緒に引用されるチクルク山などの山の位置を推定する。そうすれば、その間にいたというチンギス・カンの舅であるデイ・セチェンの地点も推定できる可能性がある。

2. チェクチェル山とその麓のシラ・ケール

これらの位置については、「チンギス・カンの前半生その2 父の死」(1)の中で述べたが、チクルク山の位置を検討するのに重要なので簡単に触れておく。

先ず帰ろうとしていたイエスゲイの家の位置をホルホ河沿いの平原と推定し、ケルレン河沿いに東から帰って来る経路を推定した。イエスゲイはシラ・ケールで毒入りの飲み物をタタルに飲まされ、3泊りの後、自分の家にたどり着いて死亡している。馬による長距離移動時の平均移動速度は最大で90km/dと見なされるので、本拠地から最大360km東、現在のチョイバルサンまでに候補地があるはずである。その付近を調べた結果、チェクチェル山としてふさわしい山は、ケルレン河の南岸にあるイフ・ツァガン・オンドル山(47.72N112.09E)しかなかった。この山の標高は1,213mで、地表からの高さは400mほどである。更に、その北麓にあるフルンブイルという町の土地の色が明るい黄色であることから、ここが黄色の原、即ちシラ・ケールであったと判断した。

3. 史書にあるチクルク山等の記述の比較

山の名は史書によって微妙に表記が異なるが、元史を除き名の出てくる場面が同じなので、秘史の名前で統一して呼ぶ。元史も秘史の名と大きく変わらないので同じと見る。表1にそれらを上げて比較した。秘史に出て来る山名は村上氏の著書に依り全て確認できたが、他の史書ではこれだけかはどうかは確認できていない。

表1 四書におけるチェクチェル山等の記載

史書	内 容
秘史	テムジン <small>テムジン</small> の父親のイエスゲイ <small>イエスゲイ</small> はチェクチェルとチクルクの間で、コンギラト氏 <small>コンギラト氏</small> の一族のデイ・セチェン <small>デイ・セチェン</small> に会った。(61節)
	イエスゲイ <small>イエスゲイ</small> は途中のチェクチェルのシラ・ケール <small>シラ・ケール</small> でタタルの民が宴をはっているのに出会った。(67節)
	ジャムカ <small>ジャムカ</small> が諸族に推されてグル・カン <small>グル・カン</small> となり、テムジン <small>テムジン</small> とオン・カン <small>オン・カン</small> に立ち向かって来た。グレルグウ山 <small>グレルグウ山</small> にいたチンギス・カン <small>チンギス・カン</small> に知らせが届いたので、オン・カン <small>オン・カン</small> と共に出撃した。先鋒隊からエネゲン・グイレトゥ <small>エネゲン・グイレトゥ</small> に一組の斥候を放った。それより遠いチェクチェル <small>チェクチェル</small> にも一組、更にそれよりも遠いチクルク <small>チクルク</small> にも一組放った。(142節)
集史	チンギス・カン <small>チンギス・カン</small> とオン・カン <small>オン・カン</small> はチェクチェルとチクルク地方に哨所を設けた。…哨兵が上述の地方から帰って来て、ナイマン軍 <small>ナイマン軍</small> の接近を知らせた。
元史	チンギス・カン <small>チンギス・カン</small> はチェクチェル山 <small>チェクチェル山</small> に軍を置き、タタルへの兵を起こした。その部長アラクトル <small>アラクトル</small> らを破った。
親征録	チンギス・カン <small>チンギス・カン</small> とオン・カン <small>オン・カン</small> がウルクイ・シレジン河 <small>ウルクイ・シレジン河</small> 方面に居た時、ナイマン <small>ナイマン</small> が諸族と連合して向かって来ようとした。帝は先に騎兵を派遣して高所に登らせ、ニエカンクイントウ <small>ニエカンクイントウ</small> 、チェル <small>チェル</small> 、チクルク諸山 <small>チクルク諸山</small> で見張らせていた。チクルク山 <small>チクルク山</small> より騎兵が来て、ナイマン軍 <small>ナイマン軍</small> が来るのを知らせた。チンギス・カン <small>チンギス・カン</small> とオン・カン <small>オン・カン</small> は軍を移し塞に入った。

4. 元史のチェクチェル山

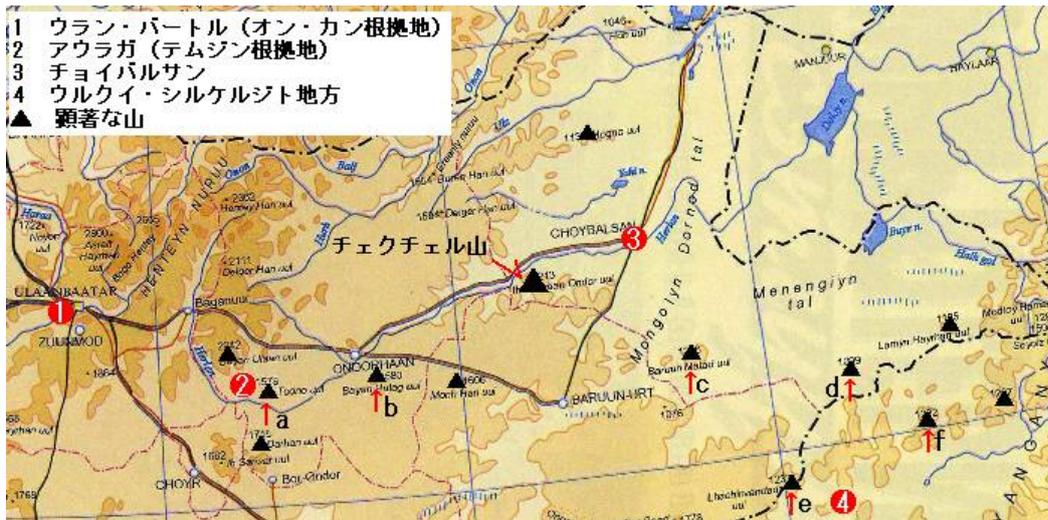
元史だけ他書と場面が異なるので先に取り上げる。テムジンテムジンがこの山から兵を起こしたのは、ウルクイ・シルケルジト河ウルクイ・シルケルジト河地方にいたタタルを討つ1202年の前のことだから、ホロンバイルホロンバイルの、即ちウルシュン河ウルシュン河地方にいたタタルを討った年、1201年の事と思われる。当時のテムジンテムジンは本拠を既にケルレン河ケルレン河の変曲点即ち現在のアウラガ付近アウラガ付近に構えていた。各地から来る軍勢を集結させたのがチェクチェル山チェクチェル山だったのだろう。実際にはその北麓の現在のフルンブイルの町フルンブイルの町 (47.92N/112.96E) であり、当時シラ・ケールシラ・ケールと呼ばれた場所である。父親のイエスゲイイエスゲイの死の原因となった場所から軍を進発させるテムジンテムジンには、タタルに対して父の仇を晴らそうとする強い思い入れが感じられる。軍兵全てがその心をくみ取っていたのに違いない。現在の地名フルンブイルフルンブイルも、いかにもホロンバイル地方ホロンバイル地方に向かうテムジンテムジンの行動を思わせる名である。何か理由があるのだろうが、筆者には調べられない。

5. チクルク山ほどの地方に探すべきか

イエスゲイイエスゲイがデイ・セチェンデイ・セチェンに会ったのはチェクチェルとチクルクの間で、西への帰路の途中で毒を飲まされたのがチェクチェル山チェクチェル山だから、当然チクルク山チクルク山はそこより東にある。チェクチェル山チェクチェル山と比べられるのだから丘のように低い山でなく目立つ山であったはずだ。しかし、既に触れたように、イフ・ツァガン・オンドル山イフ・ツァガン・オンドル山より東にそのような山がなく、大興安嶺山脈大興安嶺山脈まで行かないと山らしい山がない(図1)。仮にチクルク山チクルク山がそこにあつてデイ・セチェンデイ・セチェンがいたとしても、その場所を、「チェク

チェルル山とチルクク山の間」と呼ばないだろう。単調な平野地帯であるから、地点が特定できない。コレン湖やブイル湖の東とか西とか呼んだとしても同じである。ケン河がエルグネ河に注ぐ河曲の角とか、カイラル・テニクルカンとか、ウルシユン河のどこそことか、河とその地点の特徴を付けて呼ぶだろう。従って、真東の方向にチルクク山がある可能性は全くない。もっと北か南に探さなければならない。

図1 チェクチェル山を中心とする地勢



6. 諸山の位置関係

秘史と親征録では、エネゲン・グイレトゥ山、チェクチェル山、チルクク山の順に並んでいる。これは西から東への並びであろう。どこから見た並びかといえば、上図 2 のアウラガ、即ち当時のテムジンの根拠地から見たものであろう。すると、最初のエネゲン・グイレトゥ山は a か b の可能性が高い。a はトーノ山 (Toono uul) 1578m で、b はオンドル・ハーン市の南東にあるバヤン・フタグ山 (Bayan Hutag uul) 1580m である。a はアウラガ地域そのものであるから、b のバヤン・フタグ山がエネゲン・グイレトゥ山に比定できる。最後のチルクク山は、そこから騎兵がやって来て、ナイマン軍の接近を知らせた山だ。その頃テムジンはウルクイ・シルケルジト河地方にいた。1201年にウルシユン河地方のタタルを討った後その地で冬を過ごし、1202年の春にウルクイ・シルケルジト地方のタタルに向かって彼らを征服していた。タタルの処分を終えたテムジンの所に、夏頃、恐らく金国への挨拶か交易のためにオン・カンがやって来ていた。知らせはそこに届いたのだ。従って、4の地点の北方で、かつケルレン河やブイル湖に至るまでのどこかにチルクク山がなければならない。c、d、e、f 辺りが候補になる。

7. チルクク山の位置

以上の山の中でどれが有力候補かと言え、c のバルーン・マタド山に注目が行く。図2に示した交通路は現代のものだが、当時と大きくは変わっていないだろう。ケルレン河からウルクイ・シルケルジト地方に向かう主街道の側に位置し、周囲にそれほど高い山がなく目立つ山である。通信、恐ら

く狼煙による中継拠点としてふさわしい山である。しかも、チョイバルサンからチェクテル山までとバルーン・マタド山までの距離は同じ 120km なのである。折れ曲がった格好だが、街道に沿った二つの山のちょうど真ん中にチョイバルサンが位置している。ここで、チェクテル山とチクルク山の間にデイ・セチェンがいた、という記述を思い出す。普通に二つの山の間といえば、お互いの山が視認できる広い範囲のように思うが、デイ・セチェンがいた所を特定していたのだから、もっと正確な、真の意味での中間点にふさわしい場所を示す用語ではなかっただろうか。そう考えると、現在のバルーン・マタド山 (Baruun Matad uul) 1246m (46.99N/115.12E) がチクルク山であり、二つの山のちょうど真ん中に位置する現在のチョイバルサンが、「チェクテル山とチクルク山の間」と当時呼ばれた所である。デイ・セチェンはそこにいた。山の位置関係を図 2 に示す。

図 2 主街道と各地点



8. 山の機能

秘史に出て来る 3 つの山はテムジン領内の中間連絡拠点であり、ケレイト領内から来る通信を取り次いでいたものと思われる。「クイテンの戦場はどこか」の論考で示したように、戦場は現在のダルハンであり、そこを目指してナイマン軍はセレンガ河方面を北上して来ていた。それを発見したケレイトから発せられた信号をテムジンの領内で受け継いで行くのがこれらの山であった。山の上から麓を通るナイマン軍やメルキト軍を見張っていたとすれば、彼等はケレイト部族の地もモンゴル部族の地も素通りして来たことになるが、そのようなことは考えられない。

インターネットの情報だが、モンゴルでの狼煙通信を現代で再現すると時速 150km の速度にもなったという。詳細は分からないが、モンゴルの透明な空気と視力の優れた事で知られるモンゴル人ならばあり得るのだろう。勿論既に述べた山だけが狼煙の拠点ではなく、いくつもあったと思われる。その中でも 3 つの高い山が重要な中間拠点として機能していたので、史書に記述されたのだろう。親征録のチクルク山から騎馬で連絡がきたと言う記事は一見不思議に思える。というのは、そこからウルクイ・シルケルジト地方まで 500km 近くあり、騎馬で連絡するのは少しもったいないように思えるからである。地理的に狼煙通信が困難であったとか、あるいは、天候不順かで狼煙が使えなかったとの考えもできるが、そうではなかろう。この山がウルクイ・シルケルジト地方へ至る最後の中間拠点であったので、そこから発信した信号が確かにテムジン達のいた場所近くの観測所に届き、最後の直接連絡が騎馬によるものであったという意味だろう。

9. 何日で連絡は届いたか

ウルクイ・シルケルジト地方も広いので、仮に一番遠い今のシリン・ホトにテムジン達がいたとすると、ケルレン河行程に沿って計ってセレンゲ河までざっと 1,600km ある。狼煙の伝達速度が前述の 150km/h だったとすると 10 時間ほどで届くことになる。緯度が高い北方の夏ならば日が上るのが早く日暮れが遅いから、その日の内に届く可能性もある。長く見ても 3 日あれば充分ではなかろうか。それからいわゆるテレゲン道経由で馬を飛ばせば、軍団だけなら半月たらずで本領に戻れる。牛車の輜重部隊でも 1 月で帰ることができる。クイテンの戦いは雪の降る季節だったから、その頃までには戦いの態勢も整うだろう。ケルレン河行程はテレゲン道よりも距離が 50%ほど長いのにその行程を連絡に用いたのは、見通しの良さを生かした狼煙通信であった証拠であろう。

10. 最後に

チクルク山の位置は推定できたがあくまで地図上のことである。狼煙台としての利用の可能性も含めて現地の調査が必要である。

11. 改訂履歴

2018/11/30 表題を一部変更

2019/6/13 「父の死」の改訂に伴い、内容語句を一部変更。

以上